アーカイブズへの眼 ― 記録の管理と保存の哲学 ―

目　　次

はじめに ― アーカイブズは貌となりうるか ― …… 3

I　国家を問い質す場

第1章　日本の公文書館 ― 現在、問わるべき課題をめぐり ― …… 11

1　私的体験を場として　11
2　現在、なぜアーカイブズか　14
3　日本のアーカイブズ　22
4　歴史研究者の軛　24
5　公文書館としての責務　28

第2章　公文書館の責務と使命 …… 32

1　記憶としての歴史
― 史料保存運動と公文書館・文書館 ―　32
2　記録保存への目　39
3　記録の共有と公開
― 付与されたものとしての「歴史的文化的価値」 ―　42
4　アーカイブズ、アーキビスト、そして歴史研究者　47

第3章　情報保存の現在 ― 未来への扉 ― …… 57

1　アーカイブズといわれる世界　57
2　記録を残す営み　61

3　記録を読む目　64
4　共有と創成　66
5　社会の器として　68

Ⅱ　土地の貌たる器

第1章　貌としてのアーカイブズが問われること …… 77
1　ソーシャリティの器として　77
2　文化を担う者　82
3　いかなる貌を提示しうるか　86
第2章　記録を残す営み …… 94
1　記録を残すとは　94
2　暮らしと生業の証として　95
3　証としての記録　98
4　加納久宜の試み　99
5　持続せしめる力　102
6　マディソンの問いかけ　104
7　開かれた社会への目　106
8　歴史を問い質す営み　108
9　明日をつくる器として　109
第3章　現在社会と公文書館 …… 113
1　「政治文化」を問い質す器　113
2　記録への目　116
3　記録の共有と公開　118
4　「開かれた社会」をめざして　122

第4章　証としての記録 ── 知の遺産を活かすために ── …… 126
1　記録は問い語る　127
2　証を残す営み　132
3　歴史を想起する場として　134
4　公文書館という世界　138
第5章　地方文書館の課題と使命 …… 141

Ⅲ　知と情報の府として

第1章　企業アーカイブズの世界 …… 147
1　アーカイブズへの目　147
2　記憶の宮殿として　152
3　戦略構築の場　153
4　記録を残すこと　156
第2章　大学アーカイブズが問われること …… 163
1　アーカイブズといわれる世界　163
2　学校の記録は問いかける　165
3　大学アーカイブズの営み　166
4　記憶の蘇生と共有　170
5　経営と戦略の府として　172
第3章　アーカイブズ・図書館・博物館 …… 178
── 真理がわれらを自由にする ──
1　はじめに　178
2　「其国ノ時代、升沈ヲミルノ宝」　183
3　「歴史資料」という呪縛　189

4　記憶の器、知の府として ── 苦すぎる真理への目 ──　191
5　知識は力　193

おわりに ── アーカイブズが地に根ざすために ──　197

あとがき　201

付 1　記録保存への道程　204
付 2　アーカイブズ関係論考　207
付 3　若干の文献目録　210